経営者としての“気付き”を大切にしていく

有限会社ホームファニシングナカムラ
代表取締役　中村　聡　さん

理想を目指して

ホームファニシングナカムラでは、大川で八十年以上の間、家具の製造を行っています。「別注家具の製造では、主に公共の大きな建物などを手掛けています。生産効率が良いので、同じパターンのものを作ることには長けていますね。一本一本の別注製造には弱いですが、従業員の人数に対しての装備（機械）が充実しています。同じ種類を複数作るのには強く、作業効率も製造スピードも良いですね。同じ別注家具でも一つを製造する時は手作業の方が良い部分が多く、機械よりも早く仕上げられることもあります。そういう場面で他社と競争したときには負けてしまいますが、機械を駆使して製造できるものならば、その競争には勝てると自負しています」

そういった製造に関しては、「得意なもの、苦手なものを見極めながら仕事をしています」とお話された中村さん。現在は、ネットショップでの販売にも力を入れられているとのこと。

「ネットショップでは、自社製品を販売しています。他社から仕入れて販売しているわけではないので、利益がとりやすいです。仕入れて販売する場合、製造元の利益も必要ですし、自社の倉庫にまで運んで貰う運賃も必要になります。ですが、自社製造の場合、製造した利益を確保しての販売になります。今後競争していった際に、特に小規模事業者であればそこは強みになる

工場内の様子

助成金を受けて購入した機械

と思っています」

しかし、仕入れて販売するネットショップは集客力、販売力が強く、ホームファニシングナカムラで運営する独自のショップはそこが弱い面でもあるそうです。

「例えばそういったショップでは一日千人のお客様が閲覧されるけど、うちは百人しか閲覧してもらえない。自社のショップで百人のうち一人が購入したという確率でいくと、大きなショップでは十人が購入したということになります。今後はまず集客に注力しなくちゃいけないと考えています。専門家も交えて、集客、そして購入に繋げていきたいです。そして最終的にはネットショップだけでなく、他の製造販売でも自社で企画・設計・製造した商品を供給してお金に変えていくのが理想です。今はその理想に向かっている最中ですね」

"気付く"ことの大切さ

平成十七年に先代から代表者を引き継いだ中村さん。

「十八歳で家業に携わるようになり、勤続年数としては四十年になります。木工業の技術的なことは何も知らない状態で入社しました。父親がしっかりと指導するタイプではなく、見て触って理解するというタイプだったので、色々と独学で学びましたね。当時から本を読むことが好きだったんですが、山本夏彦さんのエッセイが掲載されていた『室内』という雑誌を購入していたのですが、その雑誌に色々なメーカーの家具を壊してみるというコーナーがありました。建築家の方が書いていたコラムでしたが、建築や家具業界の方はよく読んでいるものだったようです。それを毎号購入して、図面の書き方などを学んでいました」

ゼロからのスタートだった中村さんですが、当初は職人気質だった先代との言い争いも多かったそうです。

「当時の職人は理屈があまりなく、ホゾが固いと言われた際、どれくらい固いのかと尋ねても、固いのは固いとしか言われませんでした。その頃から明確化されない指導があまり好きではありませんでしたね。どれくらい固いのか、解決するためにはあと何ミリ必要なのか、といった明確な数値が必要だと考え、その数値化のためには機械の導入が必要でした。早い段階で様々な機械を導入したのには、そういった理由もあります。従業員を指導するためには、具体的に伝えなくてはなりません。いま働いてくれている従業員は、家具とは全く違う業界から入って仕事を覚えてくれました。なぜ覚えられたのかといえば、理屈で、具体的に教えられる状態になったからです。なぜこの数字なのか、なぜこのままだと固いのかという理由が明確にわかります。この業界で働くようになった時に理不尽さを感じたからこそ気付けたことでもありますね」

事業を続けていくなか、様々な気付きのなかで経営革新を取得したことでも多くのことに気付くことができたとお話された中村さん。取得に向けた書類を作成する際に、自社の現状を見つめ直すきっかけにもなったそうです。

「経営革新取得を目指していく間に、自社の現状や問題点など多くのことに気付けたことにより、経営者としての意識も大きく変わりました。経営革新を受けることで、当時は高度人材の助成などもあり、その時の募集で来てくれた人材がいまも一緒に頑張ってくれています。自社の現状に気付けただけでなく、良い人材にも恵まれるきっかけになりましたね」

努力の先に

夢はなんですかとお伺いしたところ、仕事をリタイアしたあとの夢はありますと笑ってお話された中村さん。

「今後十年くらい頑張って、仕事的に負荷がかからないようになった時には、山間に小さな家を立てて自給自足の生活をして、たまに趣味の釣りに行ったりできたらいいなあという老後の夢はありますね。仕事的には、肉体が壊れない限りは、最新鋭の機械や設備を導入して、精度を高めた仕事を続けていきたいですね。若い時は、ドイツをはじめとしたヨーロッパの最新鋭CNC複合機を導入するという夢がありましたが、現実問題、それは難しい部分もあります。ですが、それが叶えられるように努力しています。出来る限り従業員を酷使したくないので、人間がやっている作業を機械に置き換えるというのが夢でもありますから」